

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第8回:落語とSF-燃えよ、ドラゴン

あけましておめでとうございます。本年もこのエッセイをよろしく願います。

今年は辰年。私も年末は、年賀状に竜の絵を描きまくって手が痛くなった。

物の本（そういう名前の本があるわけではない）をひもとくと（本当に紐をとくわけではない）、竜というのは空想上の動物で、馬と鹿と蛇と鷹の合成生物（キメラ）のようなものらしい。馬と鹿と蛇と鷹。続けて読むと、馬鹿じゃったか、となる。それがどうした。

別の説では、頭部はラクダ、頭頂は蛇、角は鹿、目は鬼、耳は牛、爪は鷹、手は虎、腹は大蛇、鱗は魚に似ている、といい、つまり、いろんな動物のいいところ(?)を寄せ集めたものが竜なのである。喉のところには、逆さまに生えた鱗があって、それに触ると、竜は

たいそう怒ったという。ここから逆鱗に触れるということわざができたわけですねえ。それがどうした。

というのは東洋の竜であって、西洋の竜、つまりドラゴンというのはちょっとちがう。こっちのほうはコウモリ状の羽根が生えたトカゲとでもいうべき姿である。ゲルショッカーならコウモリトカゲスと名付けたであろうが、なぜかドラゴンという名前なのである。そういえば、アンパンマンに、バイキンマンが何に変身するかでバイキンマンとドキンちゃんがもめて、バイキンマンは「ドラゴン」と言い、ドキンちゃんは「かわいい猫」と主張したため、中をとって、ドラ猫に変身したという回があった。それがどうした。

ドラゴンは、ジュブナイル系のファンタジーにやたらと出てくる

が、たまにはこのエッセイも落語ばかりではなく、小説を紹介しておこう。ルーシャス・シェパードという作家の「竜のグリオールに絵を描いた男」という短編だ。グリオールという名の巨大な竜が魔法使いによって倒されたが、竜は完全には死んでいなかった。動くことはできないが、谷にいますわったまま邪悪な霊気を発し続けていた。そこへ、メリックという名のぼさぼさ頭の若い画家がやってきた。彼は、竜の全身に絵を描きたいというのだ。絵の具に含まれた毒素によって、描いていくうちに竜は死に至るが、それには40年の歳月を要する、画家は村人たちに語った……。いかがですか。おもしろそうでしょう。私も、年賀状にたくさん竜の絵は描いたが、竜に絵を描くとは思いつかなかった（それがどうした、はもうやめ

ておこう）。読みたい人は、「80年代SF傑作選」の上巻（早川SF文庫）、もしくは、シェパードの短編集「ジャガー・ハンター」（新潮文庫）を買うこと（ただし、書店にあるかどうかは知らない）。

映画にもよく竜は登場する。時代劇なんかだといやというほど出てくる。

たとえば「怪竜大決戦」には、大蛇丸（おろちまる）の化けた巨大な竜と自来也が変身した巨大な蛙が登場し、戦う。この竜というのが、常に口をあけて、長い舌をだらりと垂らしている。まるで、シェパードみたいなやつなのである。犬が舌を出しているのは体温調整と係わりがあるらしいが、竜が舌を出しているのはなぜなんだろう。蛇でもちろちろと出したり引っ込めたりしているのに、この竜はずーっと出しっぱなしなので

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第8回:落語とSF-燃えよ、ドラゴン

ある。あんなことしてたら喉が乾くんとちゃうやろか、とか、涎が垂れて困るだろう、とか、何かの拍子につまづいたら舌嚙んでしまうで、とか、映画を見ながらいらん心配ばかりしてしまう。だいたいだらしがないではないか。竜というのはあらゆる獣の王だというから、もう少し身だしなみはぴしっとしてもらいたいものである。この「怪竜大決戦」の竜は、どういうわけか二本脚で歩くというのも特徴の一つである。まるで人間が中に入っているようではないか、って入ってるんだけどね。

一方、大蛇丸の竜と戦うのが、主人公である自来也の化けた巨大ながまがえるである。これって、なかなか「今」の感覚ではついていけない。蛙というのは、二つのイメージがあって、一つは、がまがえる、ひきがえる、いぼがえる、

ヤドクがえる、こもりがえるなどに代表されるような、不気味で、猛毒を持ち、虫などを長い舌で捕らえてむさぼり食い、嫌な匂いや粘液を出し、吸盤であちこちを這い、奇怪な声で鳴き、ときには人に祟りをなしたりするようなイメージ。もう一つは、カエルの唄とかけろけろけろっぴ、ど根性ガエルのピョン吉に代表されるようなかわいい、ぴょんぴょん跳ねまわる人気者としてのイメージである。しかし、どこにも「かっこいい!」という認識はないはずである。ところがこの映画の主人公は、巨大な蛙に変身する。たぶん、できれば本人ももう少しかっこいいヒーローっぽい動物……というのが何かはよくわからんが、せめてウサギとかキツネとかパンダとかコアラとかラッコとかそういうのが望ましかったのではなかろうか。

何が悲しゅうてカエルに変身せなあかんのや! と陰でなげいていたのではないだろうか。映画に出てくる大ガマは、全身ぶつぶつに覆われた気色悪い姿である。どう見ても、竜のほうがかっこいいし(舌は垂らしているが)、主役っぽいのだが、なぜかガマが主役なのである。とはいっても、かわいい感じのカエルだとしても問題がある。体長40メートルのけろけろけろっぴが、竜と戦っている光景を想像するとなかなか異常なものがある。

映画の竜というと、他に思いつくものは、緋牡丹博徒お竜参上とか抜き打ちの竜とかだが、そうそう「海底軍艦」のマンダというのもいた。「海底軍艦」ではしっかり竜の形だったが、なぜか「怪獣総進撃」では角が取れてただの蛇になっていたのは、鹿とおんなじで

春先に角が抜け落ちるのだろうか。それとも、「怪獣総進撃」のマンダは、「海底軍艦」のマンダの子供だろうか。それなら一緒に登場させて「マンダ・コマンダ」という映画にすればどうか。もちろん角のあるほうはメスで(女性はよく角を出すっていうでしょ)、ママンダなわけです。コマンダのほうは面構えからしてもおそらくオスだろうから、ママンダの息子ということになる。「ゴジラの息子」という映画もあったから、「マンダの息子」というのも作ったらどうでしょう、東宝さん。あと、マンダが登場するCMを思いついた。「うーん、マンダム」それがどうした。そういえば、マンダムとガンダムは似てる。それがどうした。「ゴジラの息子」の「の」をとって、「ゴジラ息子」という映画はどうだろう。それがどうした。みんな

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第8回:落語とSF-燃えよ、ドラゴン

な、そろそろ怒ってはるんとちゃう？

さて。

竜は、さっきも書いたが、想像上の生き物だが、中には「竜を見た」という人もいる。

何でも「〇〇は想像上の生き物で……」という、「いや、わしは見た！」と言いだす人がいるものだ。ツチノコやクッシー、ヒバゴンなんかはまだ少しは信憑性があるが、ある本によると、河童を見たという人は枚挙に暇もないほどいるし、ケンムン（奄美大島の妖怪）やキジムナー（沖縄の妖怪）を見た、はては天狗を見たとか人魚を見たとか牛鬼を見たとか座敷わらしを見たなどという人もいる。ガンギ小僧を見たとか遣るか水を見たとか目目連を見たとか古庫裏ばばあを見たとか白うねりを見たとかしょうけらを見たとかそうい

うマニアックなものを見る人も中にはいるかもしれない。「わしが直接見たんやないけど、見た、というやつを聞いた」という人もいる。都市伝説などはこういう形で広まっていくのだ。たいてい「俺の友だちが実際に見たことなんや。そいつは絶対に嘘をつくようなやつやないから、この話は信憑性があるんや。だいたい、そいつが俺に嘘ついて、何の得があるねん」という前フリがあって、話が始まる。嘘というものは、得になるからつく、というものではないのである。

竜を見た、という人だが、今を去ること25年ほど前、山形県のある農家のおばさんが畑仕事の合間に大あくびしながら空をぼーっと眺めていると、空中を大きな、黒くて長い何かがくねくねと通りすぎていくのが見えた。結局、そ

の場にいあわせた4人が目撃したらしいが、その物体はどう見ても蛇で、しかも「龍神沼」の上空を飛んでいたという。それも、3匹。話ができすぎじゃないかって？
うーん……マンダム……。

この話は、宇留島進著「日本の怪獣・幻獣を探せ！」（廣済堂文庫）に載っていたのでまちがいに
く真実だと思われる。

ところで、竜はともかく、恐竜は実在した（らしい）。

といっても、確かめたわけではない。我々が知っている恐竜は、どれも化石によってその存在が知られているだけで、見た人はいない。

しかし、これまた世の中には恐竜は実は今でも生きているという説を唱えたりする人がいて、またそれを信じてしまう人もいる。コナン・ドイルの「失われた世界」

はまさにそういう話だが、アフリカの奥地にモケレ・ムベンベという水棲竜が棲んでおり、これがブロントサウルスではないかといって探検にいったり、コンゴでは鋭い牙を持つコンガマトーという空飛ぶトカゲのような悪魔の存在が知られているが、これが絶滅したプテロダクティルスではないかとか主張している人もいる。大西洋にはモササウルスが生き残っているという説もあるし、カナダのオカナガン湖にはオゴポゴという怪物が棲んでいるが、これはプレシオサウルスではないかと言われて
いる。もちろん本家ネッシーは、写真が偽物だったと撮影した本人が証言しても、いまだ健在である。

日本に目を転じると、狭い狭い島国にもかかわらず、いるわいるわ、むちゃくちゃいる。屈斜路湖のクッシー、池田湖のイッシー、

RAKUGO THE FUTURE

文:田中啓文

第8回:落語とSF-燃えよ、ドラゴン

洞爺湖のトッシー、本栖湖のモッシー、徳之島のトクシー……。何でもシーをつければいいというものではない。そういえばブラハのブラハ湖に棲むという怪物の名前はブラッシーといったかと思うが……。おや、笑いが無いようですが、皆さん、ブラッシーを知りませんか。ほら、米屋で売ってたじゃないですか。知らん、あ、そう。大阪の天王寺の山にドビュ湖という湖があって、そこにも怪物が出るという噂なんやけど……。「ドビュッシー」

あ、わかってくれはりましたか。

さて、そろそろ与えられた枚数も終わりに近づいてきたが、竜の出てくる落語というのはあるだろうか。「竜宮界竜の都」というのはあるけれど、中に竜は登場しないし、他に何かあったっけ。

……ないわ。ごめん。

竜がライターつけて、竜ライター……。いうので勘弁してもらえん？

もらえんか……。

ということで、辰年第一回目の「ラクゴ・ザ・フューチャー」は正月ということもあって少し固い話になりましたが、次回からはまたわやくちゃんにしたいと思っておりますので皆様よろしくお引き立てのほどを隅から隅までずずずず……ずずずず……ずずずずず……ずず……ずずずず……。

あー、鼻出た。

というわけで、次回はちゃんと落語の話をしたいと思っておりますのでよろしく。さようなら。さーば。ばいばい。

あー、できたできた。

今回は真面目に書いたので骨が折れた。ばきっ。ギプスしとかな。

おお、年賀状がたくさん来てい

るな。

ありゃ、こいつあほとちゃうか。今年うさぎ年、飛躍の年にしましょう、やて。うさぎ年は去年やんけ。今年辰……あれ、こいつもうさぎの絵の絵はがきで来てる。あほが多いな、新年早々。ギャグのつもりかいな。あれ、これも……これも……これも……。